

書評 湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学 -- ケニア・サンプルの民族誌的研究』

著者	佐川 徹
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	6
ページ	112-115
発行年	2007-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007354

湖中真哉著

『牧畜二重経済の人類学——ケニア・サンプルの民族誌的研究——』

世界思想社 2006年 xii+322ページ

佐川 徹

I はじめに

英国の社会人類学者エヴァンズ＝プリチャードによるヌエル社会の古典的な民族誌以来、東アフリカの乾燥地域に暮らす牧畜民は、家畜に対してつよい愛着をもつ、複雑な社会構造によって組織化された人びととして知られてきた。

しかし今日、東アフリカ牧畜社会の将来像は暗い。過放牧による自然資源の荒廃、貨幣経済の浸透による社会規範の崩壊、自動小銃の流入による民族間紛争の激化、開発プログラムのたび重なる失敗。この地域が現在抱える問題として、よく指摘されるものの一部である。

このような「牧畜社会悲観論」とでも呼びうる論調は、牧畜社会の「近代化」を目指してさまざまな介入を試みてきたものの、期待した成果を得ることができなかった各国政府や国際機関によって共有されているだけではない。1980年代以降、地域研究や人類学の言説空間においても、この悲観論は支配的となっている。たとえば、1950年代に本書の対象でもあるケニア中北部に位置するサンプル社会の人類学的調査を行ったポール・スペンサーは、その近著 [Spencer 1998] において、近年の急速な社会変化によって牧畜社会が「消滅」していくのではないかという見解を、悲愴な調子で記している。

しかしこのような悲観論が、どれほどの実証的な分析を経て導き出された結論なのかは疑問が残る。そもそもスペンサーは上述書において、牧畜民が歴史的にさまざまな困難に直面するたびに、在来の社

会ネットワークを利用したりほかの生業への一時的な転換を図ったりすることで、その困難を切り抜けてきたありようを明らかにしていたはずである。そうであるならば、近年の社会変化がもたらす困難に直面した牧畜民もまた、利用可能な資源や社会関係をもちいて、自己の生活を維持・改善するための能動的な営みを行っている可能性を想起することが、論理的に一貫しているのではないだろうか。

本書は、15カ月におよぶ現地調査から得たデータに依拠して、まさにそのような牧畜民の能動的営みを明らかにした著作である。著者の湖中は、スペンサーの調査からほぼ半世紀を経た今日のサンプルの人びとが、押し寄せる市場経済化の荒波にただ翻弄されているのではなく、かれらの生活に不可欠な家畜という資源を活用して「自己創出的な対応」(20ページ)を行うことで、牧畜民としての暮らしを維持し続けていることを、経済人類学的手法によって示している。本書の内容をみていこう。

II 本書の内容

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 二重経済の理論的枠組み
- 第2章 研究対象地域の概観
- 第3章 牧畜民による家畜市の利用方法
- 第4章 サンプル人家畜商による商業活動
- 第5章 サンプルの世帯と家計
- 第6章 総括と考察

第1章では、研究の目的と理論的背景が示される。湖中が研究の理論的な枠組みとして採用するのは、ブーケの二重経済論である。ブーケは植民地下のインドネシアにおいて、西洋の資本主義経済と現地の伝統的経済が両立している状態を指して二重経済と呼んだ。

湖中によれば、植民地下のインドネシア同様、サンプルのような周辺の地域社会で今日起きている現象は、市場経済化の進展による在来の生業経済の崩壊というような単線的な過程ではない。実際には、2つの経済システムは相互に作用・規定しあいなが

ら「併存的に複合化した状況」(5ページ)をつくりだしている。それにもかかわらず、第三世界の社会変化を分析する枠組みの多くは、生業経済を市場経済化の過程で崩壊していくだけのものとしてしか扱わない。それに対してブーケの二重経済論は、各地域の生業経済の固有性に配慮した分析を可能にする、というのが、著者がこの枠組みを採用する理由である。

もっとも、地域社会における二重経済的状况を確認すること自体が本書の目的なのではない。ブーケの枠組みを足掛かりとして、生業経済と市場経済の併存化の具体的な過程をたどり、その「複雑な絡み合いの様相」(9ページ)を描きだすことが、今日の地域研究に求められていると著者は主張する。これまで、東アフリカ牧畜社会には家畜群を最大化する傾向があり、また、家畜が富や幸福の象徴になっていることが指摘されてきた。本書の目的は、そのような牧畜社会の固有性を考慮に入れて、牧畜二重経済の具体的なありかたを示すことである。

第2章では、サンプル社会の生業様式と社会構造が概観されたあと、20世紀初めの英国による植民地化以降、サンプルがさまざまな開発プロジェクトの対象となってきたことが示される。そして、サンプルの意向を無視した多くのプロジェクトがその目的を達成することのないまま頓挫してきたなかで、1991年にケニア政府とサンプル地方議会の主導で開設された家畜定期市は、早魃への対応策として家畜を近隣民族に売却するというサンプルの歴史的な経験に対応したものであったため、今日に至るまで人びとによって頻りに利用されていることが指摘される。

第3章では、その定期市における家畜の取引事例が分析され、サンプルの人びとが市で売却するのは主としてオス家畜であり、家畜群の再生産に不可欠なメス家畜は病気や不妊の個体を除いて売却していないこと、また家畜を売却して得た現金は、おもに家畜群の最大化に寄与する未経産のメス家畜を購入するためにもちいられていることが、明らかにされる。一見したところ定期市の創設は現金経済化を促進し、家畜群の最大化という生業経済の論理を解体

していくかにみえるが、実際には、むしろその論理を維持・強化する役割を果たしているわけである。また、定期市の創設によって家畜の売却が容易になった今日においても、従来営まれてきた家畜などの物々交換が続けられていることも、著者は指摘している。

第4章では、生業経済と市場経済を媒介して利益を得る家畜交易の実態を、ひとりのサンプル人家畜商の2年間にわたる取引資料をもちいて、明らかにしている。経済利潤の最大化を至上命題とする商人の活動は、在来の社会規範を解体していく役割を果たすと指摘されることが多い。しかし実際の取引に際してサンプル人家畜商は、サンプル内部の互酬的な社会関係と他民族との経済的関係を区別することで、既存の社会規範に混乱をまねくことを回避している。かれはまた、家畜交易から得た利益によって、家畜群の最大化に寄与するメス家畜を購入している。つまりこの家畜商は、資本主義下の商社経営者のように現金を最大化するのではなく、家畜群の最大化という在来の生業経済の論理に商業活動を組み込んで、家畜交易を営んでいるわけである。

第5章では、ある集落における2世帯の家計資料の分析を行い、世帯レベルにおける生業経済と市場経済の絡み合いの具体的な様相を考察している。著者が調査対象とした2世帯は、経済的に余裕のある世帯(第4章で扱った家畜商の世帯)と余裕のない世帯であり、両者のあいだには消費動向などの点で対照的な家計戦略がみられる。しかし、両世帯とも全面的に市場経済に依存するのではなく、在来の生業経済を維持しながら家計をやりくりしているという点においては共通している。たとえば食事に関しては、定期市の創設にともなう現金利用の拡大によって、サンプルがトウモロコシへ依存する度合いが つよまったが、かれらにとって「本当の食事」はいまでも自給する家畜の乳である。また、定期市における家畜の取引事例の結果と対応するように、両世帯とも収入の大部分を家畜の購入に費やしており、物品等の購入は可能なかぎり節約している。その背景には、倹約による家畜群の最大化に価値を置くサンプルの家計観が存在していることを、著者は指摘

する。

第6章では、以上の議論を総括し、そこから導出される開発政策への提言を行っている。第3章～第5章の分析から、定期市における交換、家畜商の商業生産、世帯における消費のいずれのレベルにおいても、サンプルの人びとは現金や市場を生業経済の枠組みに馴化しながら取りこんで経済活動を営んでいることが、明らかとなった。著者は、サンプル社会が市場経済に単線的に移行していかないおもな理由として、現金が担うことのできないさまざまな社会的価値を家畜が担っている点を挙げる。つまりサンプルでは、社会的幸福を実現するための対内的・非商業的貨幣としての家畜の役割が、経済的利益を獲得するための対外的・商業的貨幣としての現金の果たす役割と、拮抗しながらもゆるやかに接合しているのである。著者は、そのような経済体制を牧畜二重経済として位置づける。牧畜二重経済は、貨幣の獲得を最終目的とする貨幣経済とは対照的に、倹約を旨とする牧畜民的な消費感覚に支えられ、家畜の獲得を最終目的とする経済体制である。著者はその基本的な仕組みを、L-M-L'(Lは家畜、Mは貨幣)と定式化している。

著者は最後に牧畜二重経済を、近代化に直面したサンプル人による内発的発展の試みとして位置づけ、それを保護・支援していくための試案として、家畜を地域通貨として公認すること、牧畜民同士が家畜などの物々交換を行う特別区域を設置し税制的な優遇措置をとること、牧畜民の小規模な経済活動、すなわち牧野インフォーマル・セクターを支援すること、の3点を開発にたずさわる人びとに提言して、本書を締めくくっている。

Ⅲ 本書へのコメント

以下では、本書に対して評者が評価すべきだと考えた点と疑問に感じた点を記す。

本書が評価されるべき第1の点は、本稿の冒頭で示した「牧畜社会悲観論」に対する明確な反証例を提示していることであろう。牧畜に依存したサンプルの暮らしは、市場経済化のなかで「消滅」してい

くのではないし、「伝統」の殻のなかに頑なに閉じこもるのでもない。本書はそのような二項対立的な構図自体を無化してしまう、牧畜民の柔軟な諸実践を描きだすことに成功している。サンプル社会についてはすでに、その精巧な社会構造を構造機能主義的な枠組みで静態的に分析したスペンサーによる民族誌 [Spencer 1965] があるが、湖中は、変わりゆく世界のただなかを生きる人びとの創造的な生の営みを克明に記した、新たなサンプル民族誌を提供してくれた。本書を読み終えた評者は、東アフリカ牧畜社会は衰退していく運命にあるのではなく、つねに変わりながら存在し続けていくのだとの思いをつよくした。なお本書には、現在のサンプルの暮らしを伝える写真が数多く掲載されており、議論の展開に彩りを添えている。

第2の点は、経済人類学への貢献である。1980年代以降の経済人類学においては、地域社会が市場経済と結びつく過程で生じるせめぎあいの諸相を検討することが主要なテーマとなり、これまで多くの事例研究が蓄積されてきた。しかしそれらの研究の多くは、理論的には洗練されていながらも、人びとの言説だけをなぞった印象論的な内容にとどまるものが多かった。それに対して本書は、家畜の生産、交換、消費という一連の経済的過程における「複雑な絡み合いの様相」を、徹底的な定量データの提示によって明確に示し、それを総合的に分析したうえで、牧畜二重経済という分析枠組みを先鋭化している。複雑に入り組んだ諸現象の背後にある在来の論理の核を実証的に解明することに心血を注ぐ、湖中の禁欲的にも映る姿勢には、研究者として賞賛を禁じえない。

つぎに評者が疑問に感じた点を述べる。それは、家畜の定期市の創設や家畜商の商業活動が、村落で毎日家畜を放牧し、ミルクや血を摂取して暮らしている「ふつうの」牧畜民の社会関係に、どのような影響を与え、それがサンプル社会の統合にどのような変化をもたらしているのかという疑問である。

たとえば、多くの牧畜社会には、成長したオスウシを村で屠殺してその肉をほかの成員と共食することで、社会的連帯を強化する慣習が存在していた。

そのような慣習が存続してきた背景には、家畜群の最大化のためには不要になるオスを、子どもを生むメスと交換しようとしても、そのための経路が存在していなかったという事情もある [太田 2002]。

それに対して本書の事例では、定期市の創設によってオスをメスに転換することがきわめて容易となった。では果たして、現在でも肉の共食はかつてと同じように続けられているのだろうか。もし大部分のオスが市で売却されることによって、共食の機会が減少しているとすれば、それを媒介として形成されてきた社会関係は、市場という「悪魔の碾き臼」による解体の過程をたどっているのではないのだろうか。

また、第5章における世帯の家計分析をみるかぎり、家畜商のように市場経済をうまく利用した成功者とそれ以外の成員のあいだにはすでに明確な経済格差が生まれており、それは今後ますます拡大していくことが予想される。そうであるならば、「市場経済化の進展により経済格差が拡大することで、既存の社会関係は解体の過程をたどる」と論ずる「悲観論者」たちに、著者はどう答えるのであろうか。

もちろん本書は、定期市での取引や家畜商による交易など、外部社会との接合面における現象をおもな主題としているのだから、村落レベルの社会関係に関する評者の問いは、ないものねだりに思われるかもしれない。しかし市場経済化とは、そのような接合面での現象が村落レベルの人とモノの関係や人と人の関係を変容させていく一連の過程であることを考えれば、たとえば「相互扶助を望ましいとみなす社会的規範」(222ページ)の持続と変化について、村落での具体的な社会関係に基づいてもう一步踏み込んだ記述がなされていれば、牧畜二重経済をめぐる議論はより説得力を増したのではないだろうか。

もっとも湖中自身、市場経済化のさらなる進展により牧畜二重経済が衰退していく可能性を指摘し、

今後の動きを注視していく必要性を強調している。本書が、これから東アフリカ牧畜社会、とくにその変容を調査する後進の研究者たちにとって、欠かすことのできない参照点となることは、疑問の余地がない。

本書を注意深く読み進めていけば、その淡々とした文体と議論の展開の背後に、人びとの「自己創出的な対応」を実証的に明らかにすることこそ、「真の意味で牧畜民らしい強靱な生きざま」(277ページ)を示すことになるという、著者の人類学者・民族誌家としての自負を読みとることができよう。そしてまた、人びとが「よりよく」生活していくためには、どのような形態の介入がなされるべきなのかを熟慮する、著者のフィールド・ワーカーとしての真摯な問題意識を感じ取ることもできるだろう。第6章の開発政策への提言については、開発関係者からの反応を待ちたい。

文献リスト

<日本語文献>

太田至 2002. 「家畜の個性性と商品化——東アフリカの牧畜民は資本主義者か——」『アジア・アフリカ地域研究』第2号 306-317.

<英語文献>

Spencer, P. 1965. *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. London: Routledge and Kegan Paul.

——— 1998. *The Pastoral Continuum: The Marginalization of Tradition in East Africa*. Oxford: Clarendon Press.

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)